

顕現後第四主日（1月29日の聖書箇所）

I 第一朗読（ミカ6章1―8節）

- 1 聞け、主の言われることを。  
立って、告発せよ、山々の前で。  
峰々にお前の声を聞かせよ。
- 2 聞け、山々よ、主の告発を。  
とこしえの地の基よ。  
主は御自分の民を告発し  
イスラエルと争われる。
- 3 「わが民よ。  
わたしはお前に何をしたというのか。  
何をもってお前を疲れさせたのか。  
わたしに答えよ。
- 4 わたしはお前をエジプトの国から導き上り  
奴隸の家から贖った。  
また、モーセとアロンとミリアムを  
お前の前に遣わした。
- 5 わが民よ、思い起こすがよい。  
モアブの王バラクが何をたくらみ  
ベオルの子バラムがそれに何と答えたかを。  
シテムからギルガルまでのことを思い起こし  
主の恵みの御業をわきまえるがよい。」
- 6 何をもって、わたしは主の御前に出で  
いと高き神にぬかずくべきか。  
焼き尽くす献げ物として
- 7 主は喜ばれるだろうか  
幾千の雄羊、幾万の油の流れを。  
わが咎を償うために長子を  
自分の罪のために胎の実をささげるべきか。
- 8 人よ、何が善であり  
主が何をお前に求めておられるかは  
お前に告げられている。  
正義を行い、慈しみを愛し  
へりくだって神と共に歩むこと、これである。  
主なる神が語られる  
誰が預言せずにいられようか。

II 第二朗読（コリントの信徒への手紙I 1章26―31節）

26 兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。27ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。28また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身の卑しい者や見下げられている者を選びました。29それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。30神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。31「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりにするためです。

Ⅲ福音 (マタイ5章1―12節)

- 1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。
- 2 そこで、イエスは口を開き、教えられた。
- 3 「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
- 4 悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
- 5 柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
- 6 義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
- 7 憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
- 8 心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
- 9 平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
- 10 義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
- 11 わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

①今日の福音は大きく三つの段落(1―2節・3―10節・11―12節)に分けることができる。1―2節は、3節以下のイエスの言葉(山上の説教)が語られた状況を説明するためのマタイの編集句である。

3節から山上の説教が始まるが、このイエスの言葉は切れ目なく――テーマは変化するが――7章27節まで続き、7章28―29節(「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」)は山上の説教を閉じるマタイの編集句である。5章の3―10節と11―12節は確かに「幸い」の言葉であるが、3―10節で「幸い」と言われるのは「人々」であるが、11―12節では「あなたがた」に変えられているし、文体は全く異なっているから、別の段落であるのは明らかである。ちなみに、5章3節で始まり、7章27節で閉じられる山上の説教は、5章3―10節の「人々」への呼びかけで始まり、7章24―27節の「人々」への呼びかけで閉じられており、その間はすべて「あなたがた」への呼びかけになっている。

②今日の福音の段落(3―10節)は、真の幸福をもたらす八つの端緒を述べている(そこから真福八端と呼ぶことがある)。各節の一行目では真の幸いを得る人が誰であるかを述べ、二行目ではそのような人が幸福である理由を述べている(日本語訳では訳されていないが、二行目の冒頭には「なぜなら」と訳せる言葉が置かれている)。真の幸福にあずかる八人について述べる八節は思い起こすままに並べたのではない。それを示す証拠をあげておこう。

③全体の最初と最後に同じ文章「天の国はその人たちのものである」が置かれ、困い込みを形成しているから、3―10節の全体性が強く意識されているだろう。

④3―6節で幸いとされる「貧しい人々」・「悲しむ人々」・「柔和な人々」・「飢える人々」は、いずれもπ(ピー)で始まるギリシア語であり、しかも6節と10節にマタイが好む「義」が置かれているから、3―6節と7―10節とがそれぞれ一つのまとまりを作り上げており、3―6節を前半部、7―10節を後半部と呼ぶことができる。

⑤各節の二行目に注目すると、3節と10節は困い込みを作り上げ、4節は受動形、5節は能動形、6節は受動形であり、7節は受動形(ギリシア語文での形は受動形)、8節は能動形、9節は受

動形である。とすると、前半部も後半部も「受動形+能動形+受動形」という配列になっている。  
 (二)での受動形は神的受動形 (theological passive) と見ることが可能だから、行為主体は神である。能動形で表された行為の主体は人々であるから、前半部でも後半部でも行為主体は「神+人+神」という順序で配列されていることになる。  
 ④この特徴に基づいて、全体の構成を図式化すると、次のようになる(逐語的な訳を用いている)。

- 3 幸いで 貧しい人たちは 霊に関して、  
**なぜなら 彼らのもので ある 国は 天の。**
- 4 幸いで 悲しんでいる人たちは、  
 なぜなら 彼らこそは **慰められるだろう。**
- 5 幸いで 柔和な人たちは、  
 なぜなら 彼らこそは **受け継ぐだろう** 地を。
- 6 幸いで 飢え そして渴いている人たちは **義に**、  
 なぜなら 彼らこそは **満たされるだろう。**
- 7 幸いで 憐れみ深い人たちは、  
 なぜなら 彼らこそは **憐れみを受けるだろう。**
- 8 幸いで 清い人たちは 心において、  
 なぜなら 彼らこそは **神を 見るだろう。**
- 9 幸いで 平和を造る人たちは、  
 なぜなら 彼らこそは **神の子たちと 呼ばれるだろう。**
- 10 幸いで 迫害されている人たちは **義のために**、  
**なぜなら 彼らのもので ある 国は 天の。**

④各節の解説。

3節

旧約聖書で「貧しい」を意味する単語は、アーニー、アーナーブ、エブヨン、ダル、ルーシユなどである。これらの単語の語義をBDBによってまとめておこう。

㉞アーニー

- ① 貧しい・ひどく貧しく (申命記十五11)
- ② (金持ちや権力者に圧迫されて) 貧しく弱い (イザヤ三14)
- ③ 貧しく、弱く、苦しめられているイスラエル人、敬虔な人 (詩編三五10)
- ④ 偉ぶらず、慎み深い (詩編十八28)

㉟アーナーブ

- ① (貧しいので神の前に) 低く、へりくだって (民数記十二3)

㊱エブヨン

- ① (物品がなく) 貧しい (申命記十五7・9)
- ② (圧迫された) 貧しいもの (アモス四1)
- ③ (宗教的な意味合いで) 貧しい (詩編四〇18)

㊲ダル

- ① 弱く・やせた (創世記四一19)
- ② 零落した、貧しい (出エジプト記三〇15)

㊳ルーシユ

- ① 欠けている・貧しい (サムエル記上十八23)

ダルやルーシユには宗教的な意味合いはほとんどないようだが、アーニー、エブヨンには宗教的な意味がまじっているし、特にアーナーブでは宗教的な意味合いが強い。しかし、我々に不思議なのは、同じ言葉が「物質的に貧しい」とこと「神の前にへりくだる敬虔さ」とを表せ

ることである。日本語の「貧しい」からはどうも理解できることではない。なぜこのようなことが起こったのだろうか。

このようなことを可能にした根本は、土地についての特殊な見方にあるといえる。イスラエルの神ヤーヴェはもともと自分の所有物である土地をイスラエルの民に与え、すべての人々が貧しさに苦しめられずに生きるようにと配慮したとされる(詩六八11)。そうであれば、イスラエルには恒常的な貧困はないはずである。そこで、申命記15章は

7 あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、8 彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。9 「七年目の負債免除の年が近づいた」と、よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。10 彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。11 この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。

と述べて、貧しい者への配慮を求めている。しかし、自身の怠惰さのゆえに(箴六6-11)、あるいは富を持つ者の身勝手な行動のゆえに(アモ五10-12)、先祖伝来の権利(土地)を手放さざるを得なくなった人たちが現れてしまい、彼らがダルとか、エブヨーンと表現された。また、特に詩編において、圧迫され苦しむ悩む詩編作者が、不当な扱いに抗議の叫びをあげる自分自身を「貧しい者」(アニー・エブヨーン)と表現したことから、「へりくだった、敬虔な者」を指すアナーブ(アナヴィーム)といった概念が使われるようになった(詩十2・9・12・17、詩二二25・27、三五10、七二2・4・12、詩一〇二1など)。ちなみに、箴言における「貧しい者(ルーシユの分詞形ラーシユ)」は宗教的意味合いがうすいが、貧しい者への慈善行為は重要な意味を持っている。また、ヤーヴェは来るべき日に貧しい民を救うという終末論的な希望の中で、クウラン宗団は自分たちを「光の子」と呼び、世の人(闇の人)と区別した。

イエスが「貧しい人たち」と述べたときに使ったアラム語(ヘブライ語)がなんであったかを決定するのは難しい。しかし、もつとも可能性がありそうなのは、アニーのように、物質的な貧しさと精神的な貧しさ(低くなり、敬虔な人)のどちらをも表せる言葉ではないだろうか。なぜなら、イエスが神を意識することなく、社会的に不公平だけを解消することは考えないと思えるからだ。大事なのは、イエスにさかのぼると思われる三つの至福(3・4・6節)を述べるとき、救いの約束にながしかの条件を付けることなく、しかも貧しい人々を宗教的に意味づけることもしていない、と思われることである。救いの約束は端的に宣言なのであり、神の救いの業に頼るほかはないのであろう。

ルカの並行箇所には「霊に関して」がない。おそらく、マタイによって加えられたのであろうが、この「霊に関して」とはなにを意味するのか。これはギリシア語原文では名詞プロネウマ(霊)の与格形である。「霊に関して」をめぐって二つの問いが生じる。ひとつは与格形によって何が表わされているかであり、もうひとつはここでの「霊」は人の霊なのか、それとも神の霊なのか、ということである。この文脈での与格形は次の二つのどちらかであらう。

① 具格的与格形(道具・方法・手段などを表す与格形)とみれば、貧しさは比喩的な意味ではなく、つまり「へりくだっている」という意味ではなく、経済的な貧しさを表す可能性が高い。そして、ここでの霊が人間の霊であれば、「自分自身の精神によって貧しい」、つまり「自発的に貧しい」の意味であり、神の霊(聖霊)であれば、「神の霊によって貧しい」の意味になる。しかし、どちらにも難点がある。

② 関係・限定を示す与格形(…に対して)とみれば、貧しさは比喩的な意味合いに近づくことになる。そして、「霊」が神の霊であれば、「神の霊に関して貧しい」の意味になり、神の霊を受けるためにへりくだる、といったことになる。しかし、これはありえないことではないが、奇妙さが残る。したがって、最も可能性が高

いのは、「人の霊に関して貧しい」であろう。この場合は、自分の力を信頼できず、勇気を欠き、絶望している状態を表すだけか、あるいは、だから神の前に救いを求めて立つという積極的な態度を考えることになる。

旧約聖書に類似箇所はあるが、完全に一致した表現はない。クムラン文書に並行箇所があるが、解説が難しかったり、不確かであったりして、マタイのこの箇所の解釈には用いることができない。

第一至福の解釈が後の教会にどのように受け止められたかについて触れておこう。古代教会における教父たちの大多数は、「霊に関する貧しさ」を謙遜と理解した。「霊に関して」がマタイによる付加だとすれば、イエスが「貧しい者たち」とのべるとき、経済的に困窮する人々を考えていた可能性が高い。しかし、そのような見方は後退してゆき、裕福な者も貧困者と同じように祝福されている、と受け止められることになる。このような貧しさの精神化は、エックハルトがおこなった第一至福についての説教の中にはつきりと表れている。エックハルトによれば、「霊において貧しい者」とは、何物も欲しないがゆえに、神の愛の意志を成就することさえ欲しない者であり、しかも何一つ知らないがゆえに、自分自身の内における神の業についても何一つ知らない者のことであり、最後に、何一つ持たないがゆえに、神が働くべき場所さえ自分の内に持たない者のことである。こうして、古代教会においては、自発的な貧しさという解釈がかなりの役割を演じている。その場合、第一至福はもはやすべてのキリスト信徒すべてに適用されず、ただ聖職者や修道士にあてはまる教えとされた。しかし、今日ではカトリック教会でもこのような解釈が主要な解釈ではない。

#### 4節

動詞「悲しむ（ペンセオー）」は新約聖書では合計10回使われるが、そのうち6回はクライオー（泣く）と一緒に使われる。この動詞は人の死を「悲しむ」の意味で使われ、マルコ16章10節ではイエスの死を悲しむ弟子たち使われているが、花婿が共にいるときには「悲しむことができずに、喜ぶ」（マタ915並行）とされる。しかし、1コリ52や2コリ12-21では、罪を「悲しむ」の意味である（ヤコ49）。マタイの第二至福では、神だけにしか希望を持つことができない人の悲しみを表しているのかもしれない。

#### 5節

第三至福における「柔和な」について。

使徒教父文書——使徒以後の時代の多様な文書群を指し、何がキリスト教信仰の中心事であるかを模索する文書群である。最古の文書は紀元後96年ごろに著わされた1クレメンズである——になると、プラユス（柔和な）の並行語は、エースキオス（静かな）であり（1ペテロ34、1クレメンズ一三四）、マクロテュモス（忍耐強い）や、エレエーモン（憐れみ深い）（ディダケー三・七―八）や、エビエイーケス（優しい）（テトス三・二、1クレメンズ二一・七）であり、特に怒りから遠い状態を表している。しかし、このような意味合いをそっくりそのままマタイ55に当てはめることは適切ではない。マタイの第三至福の「柔和」を理解するためには、この箇所が詩編三七の11節からの引用であることに注目すべきだろう。7節から引用すると

7 沈黙して主に向かい、主を待ち焦がれよ。  
繁栄の道を行く者や

悪だくみをする者のことであら立つな。

8 怒りを解き、憤りを捨てよ。

自分も悪事を謀ろうと、いら立ってはならない。

9 悪事を謀る者は断たれ

主に望みをおく人は、地を継ぐ。

10 しばらくすれば、主に逆らう者は消え去る。

彼のいた所を調べてみよ、彼は消え去っている。

11 貧しい人は地を継ぎ

豊かな平和に自らをゆだねるであろう。

となる。11節で「貧しい人」と訳されたヘブライ語はアーナーブであり、「貧しいので神の前に低く、へりくだっている状態」を意味する言葉であった。「人は、貧困や危機ないし富や裕福の内に生まれた。現状の維持が至高の目的であった古代オリエンツ社会において、社会的な平等は「正常」と見なされた。……しかし、ある人が、事故や病気など不運な状態によって、受け継いだ地位、すなわち割り当てられた財の取り分を守れずに貧しくなることは、問題とされた。……旧約聖書においては、貧者は神の庇護の下に置かれた」(旧約新約聖書神学事典52頁以下)。だから、神が貧者を救うために介入すると説くことができたし、詩編37では、「主に望みをおく人」と「貧しい人」は同義語のようにとらえられている。もちろん、人は神の行動にすべてをゆだねるのではなく、神の業に参与することも説かれている。ちなみに、11節の「貧しい人は地を継ぐ」は、旧約聖書ギリシア語訳(七十人訳)では、「貧しい人」がプラユスであり、「地」はゲー、「継ぐ」は動詞クレーノメオーの未来形であるから、マタイ5と同じギリシア語が使われている。

形容詞プラユスへ柔和な $\searrow$ を用いる福音書はマタイだけで、3回用いている。その用法をまとめておこう。

マタイ二一五 「柔和な方」 武力を用いない平和な王としてのイエス  
 マタイ十一二九 「柔和で」 疲れた者と軛を共にするイエス  
 マタイ五五 「柔和な人たち」 イエスと軛を共にするキリスト者

#### 6節

第四至福の「義」には三つの解釈の可能性がある。それは

- (1)人間の行動としての義、
- (2)神の賜物、あるいは神の力としての義、
- (3)両解釈を結合して、賜物、そして課題として、神が求める義

である。解釈の歴史を見ると、第一の型は古典的・古代教會的、また「カトリック的」である。この場合、「義」は人間的振る舞いを意味し、たいていの場合は、所有欲を否定する特別な美德か、あるいは、美德の総体そのものを意味する。この解釈に立つと、「飢え、また渴く」を自ら進んで取るべき態度になる。

その後、とりわけ、宗教改革的釈義を通して、プロテスタント圏では潮流は逆転し、この句はパウロから解釈されるようになる。その際、人間が憧れる義は、終末時に報いを与える神の力というよりは、むしろ、今ここにおける神の恵みと解釈される。「飢え、また渴くことは」受動的意味合いを含むことになる。

「義」はマタイのすべての箇所において、人間的振る舞いとして理解できる。八つの至福における「義」は、前半部の最後(第四至福)と後半部の最後(第八至福)に見られるが、10節の「義」は、人間的振る舞いと解釈すべきである。また、ユダヤ教やヘレニズムにおける「飢え、渴くこと」は、「 $\searrow$ を切望する」ことだけでなく、積極的に「 $\searrow$ を得ようと努力する」の意味でも使われる。ここでは後者の意味であろう。八つの至福の「義」は、神によってその民に命じられた振る舞いと見るべきであろう。それを具体的に語るのが、マタイ5章20―48節である。

#### 7節

聖書における慈しみ・憐れみ

旧約聖書。「慈しみ」とか「憐れみ」は旧約聖書にとって中心的な神学概念である。人間に対する神の振る舞いは、慈しみ(憐れみ)によって、また慈しみ(憐れみ)の中で行われる。人間は自らが体験した神の慈しみ(憐れみ)を、慈しみ(憐れみ)深い振る舞いを他人に示すことによって、神に応答する。

日本語で「慈しむ」と言えば、「いとおしみ、大切にすることであり、「憐れむ」と言えば、「不憫に思い、同情することであろう。旧約聖書で「慈しみ」と訳される言葉はヘセドであることが多く、「憐れみ」と訳されるのはラハミームである。たとえば詩編二五の6節に

主よ思い起こしてください、あなたのとこしえの憐れみと慈しみを

とあるが、ここでの「憐れみ」はラハミームであり、「慈しみ」はヘセドであるが、この箇所のように同義語として扱われる箇所はかなりある。ラハミームは旧約聖書全体で40回ほど使われるが、そのうち8回はヘセドが並行語であり、意味は同じだと言ってよい。しかし、日本語の「慈しむ」と「憐れむ」が微妙に異なるように、ラハミームとヘセドも異なる意味合いをもっている。ラハミームはレヘムから派生した語形である。創世記29章31節に

主は、レアが疎んじられているのを見て彼女の胎を開かれたが、ラケルには子供ができなかった。

とあるが、「胎」と訳されたヘブライ語がレヘムである。このように、ラハミームは胎を意味する言葉から派生しているから、「他者に対する本能的な愛情から生じる同情」を表す傾向をもつ。一方、ヘセドは二人の人物を結びつける愛情とか尊敬であり、本能的な愛情というよりは、自覚を伴った慈愛」を指すと言えよう。まず、ヘセドから細かい語義を見よう。ヘセドの全用例は35回であり、人間が持つ「慈しみ」と神が持つ「慈しみ」に分けることができる。

I 神のもつ「慈しみ」

①特に、神の「慈愛」。

②敵や困難から解放する「慈しみ」。神はロトに「慈しみ」を示し、命を救おうとした(創一九19)。

③死から命を守る「慈しみ」。あなたの「慈しみに」ふさわしく救ってください(詩六5)。

④益的な生活を活気づかせる「慈しみ」。あなたの「慈しみ」をもって私を力づけてください(詩一九76)。

⑤罪から人を贖う「慈しみ」。私を「慈しみ」をもって憐れみ、罪をぬぐってください(詩五一3)。

⑥契約を守る「慈しみ」。神は契約を守り、「慈しみ」を注ぐ(申七9)。

⑦神の属性を表す次のような言葉と一緒に使われる。  
まこと(詩二五10)。憐れみ(エレ一六5)。裁き(詩一〇一1)。恵みのみ業(詩三六11)。恵み(詩二三6)。

II 人間のもつ「慈しみ」

①他人に好意をもち、他人の利益を図る「親切心」。ダビデがヨナタンの家に示す「慈しみ」(サム上二〇15)。

②特に身分が低く、欠乏していて、哀れな人に向けられる「親切心や同情」。絶望している人にこそ向けられる友からの「同情」(ヨブ一六4)。

③主に対するイスラエルの「愛情」。イスラエルの若いときの「真心」(エレ二二)。

④愛らしい容貌。肉なる者の「愛らしさ」は野の花のよう(イザ四〇6)。

I 神がもつ「憐れみ」。

どうか「御憐れみ」を速やかに差し向けてください(詩七九8)。私は深い「憐れみ」をもってイスラエルを引き寄せる(イザ五四7)。私は正義と公平と慈しみと「憐れみ」をもってあなたと契りを結ぶ(ホセ二二1)。深い「御憐れみ」をもって背きの罪をぬぐってください(詩五一3)。造られたものすべての上に「憐れみ」がある(詩一四五9)。

II 人間がもつ「憐れみ」。

エドムは剣で兄弟を追い、「憐れみの情」を捨てた(アモ一11)。イスラエルの民を虜にした者が彼らに「憐れみ」を示すように計られた(詩一〇六46)。バビロンは捕囚民に「憐れみ」をかけなかった(イザ四七6)。

ヘセドは神のヘセドと人間のヘセドに分けられているが、七割強が神に使われる用例である。また、ラハミームも神に使われる用例が七割になっている。イエスの時代の人々は、現代人とは違って、神の存在を強く意識していたしるであろう。このことは、ヘセドの用例のIの①

を見るというそう明瞭になる。神の慈しみは、敵や困難から解放人を解放し、死から命を守り、霊的な生活を活気づかせ、罪から人を贖う力だとされている。これほど多様な力を聖書の時代の人々は神の慈しみに認めているのである。我々が考える神の慈しみはきわめて貧弱なように思う。

新約聖書。新約聖書において、「慈しみ」や「憐れみ」を表すために中心的な役割を果たした語はエレエオ―とその派生語である。この語は「だれか他の人が被っている何らかの害悪を目の前にして生じる心情、およびその心情から生まれる行為」を表すが、聖書では旧約聖書的な用法から影響を受けている。例えば、ルカ1章の「マリアの賛歌」である。この賛歌は二つの部分に分けられるが、前半部（47―50節）の最後と後半部（51―55節）の最後に置かれている。つまり

50 その**憐れみ**は代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます

54 その僕イスラエルを受け入れて、

**憐れみ**をお忘れになりません、

55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、

アブラハムとその子孫に対してとこしえに。

とあるが、赤色の「憐れみ」はいずれもエレエオ―の名詞形エレエオスである（50節については詩一〇三17を、54節については詩九八3を参照。また、「ザカリアの預言」の72節、78節をも参照）。また、58節に

58 近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。

とあるが、傍線部を直訳すると、「主がそのエレエオスを彼女において大きくさせた」となる。

これらの用法が示していることは、「旧約聖書において約束され、イスラエルの救済史において経験された神の恵み深い慈しみ（ヘセド）が、取るに足らぬ者や貧しい者たちの前で、神がご自身を放棄すること、つまり神の子が人となることにおいてついに満ち溢れた」ということである。

## 8節

第六至福における「清さ」

聖書が「心に関して清い」、ないしは「心の清い」と述べるとき、詩編が説くように、敬虔さを表し、罪なき、神に対する二心なき従順さを指している。マタイが「心に関して」と述べたのは、祭儀は不要で「心」の清さを示す態度を求めたのではない。ユダヤ教は「清さ」という言葉で、より狭い祭儀的用語法を考えただけでなく、包括的な意味での人間の清さについて語ってもいた。マタイも祭儀とは無関係の清さを知っているが、だからと言って祭儀を無効と考えたのではない。マタイ五21―26が

21 「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。22しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。23だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟

が自分に反感を持つているのをそこで思い出したなら、24その供え物を祭壇の前に置き、行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。25あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。26はつきり言っておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

と述べるように、祭儀の必要性を認めている。

また、「彼らは神を見るだろう」との約束は、その他の至福の場合と同じように終末論的に考えられている。ユダヤ教も初期キリスト教も、この世においてはモーセにさえ見られなかった神が、終末においては顔と顔を突き合わせて眺められ得ることに期待をかけている。例えば、

1 コリ十三11―12は



11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見るようになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにはつきり知ることになる。

と述べている(1ヨハ3:2・黙二:2-4をも参照)。

9節

「平和を実現する人たちは」は形容詞エイレーノポイオス《平和を作り出す》の複数主格形であり、名詞的用法である。この語は新約聖書ではこの箇所のみ使われている。動詞形エイレーノポイエオーはコロ1:20

その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。

に一度だけ使われている。国と国の戦争もあれば、個人と個人の争いもあるが、どのような類の争いであれ、平和が必要である。人間が作り出した平和はもろいが、聖書が説く平和は神の恵みの充満としての平和であり、恒久的である。そのような平和は神の国が到来したと初めて可能になる。しかし、キリストに従う者は今、あらゆる段階における平和を積極的に追及すべきであり、そのような者が幸いなのである。

逐語訳を見るとわかるように、「神の子ら」というように複数形が使われている。真に神の子であるのは、十字架によって平和を打ち立てたキリストであるが、我々も平和を打ち立てたキリストに倣って「平和を実現する人たちは」の一員になれば、神の子と呼ばれることになる。ここでの「神の子ら」は創世記6章の「神の子ら」を指しているかもしれない。そこには1さて、地上に人が増え始め、娘たちが生まれた。2神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした。3主は言われた。「わたしの霊は人の中に永久にとどまらべきではない。人は肉にすぎないのだから。」こうして、人の一生は百二十年となった。4當時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。とあり、おそらく「天使」のような存在を考えているのだろう。

動詞「呼ぶ」はいろいろな意味合いで使われるが、ここでは「そのように呼ばれた人物は名前が指し示す通りの人物である」という意味合いを込めて使われているだろう。

国語辞典によると平和とは「特に、戦争がなく、世の中が安穏であること」だが、聖書の説く平和はそれとはずれがある。それを示す好例がサム下11:5-8に見られる。そこには

5子を宿したので、ダビデに使いを送り、「子を宿しました」と知らせた。6ダビデはヨアブに、へト人ウリヤを送り返すように命令を出し、ヨアブはウリヤをダビデのもとに送った。7ウリヤが来ると、ダビデはヨアブの安否、兵士の安否を問ひ、また戦況について尋ねた。8それからダビデはウリヤに言った。「家に帰って足を洗うがよい。」ウリヤが王宮を退出すると、王の贈り物が後に続いた。

とあるが、7節に三度も「平和(シヤロム)」が使われている。二度の「安否」と、最後の一つは「戦況」と訳された句に使われている。「戦況」を直訳すれば、「戦争のシヤロム」となる。ここに示されているように、シヤロムは必ずしも「戦争のない状態」を表す言葉ではない。何かで完全に健やかな状態を表す。ここでは「戦況の健やかさ」、つまり戦争がうまく具合に進んでいるかどうかをダビデは尋ねたのである。

10節

「迫害されてきた人たち」は動詞ディオオーコー《迫害する》の完了受動分詞の複数男性主格形であり、名詞的用法である。この動詞は新約聖書では45回使われている(マルコでは使われていない。パウロの書簡で18回(ロマとガラで5回ずつ、フィリ3回など)、ルカ文書で12回(ルカ3回・使徒9回)、マタイで6回、ヨハで3回使われている。ちなみに、名詞形ディオオーゴス《迫害》は10回使われている。ディオオーコーの本来の語義は「追い払う・駆り立てる・動かす」であり、それが「迫害する・放逐(ほうちく)する」といった意味まで広がり、

さらに転義して何かを「熱心に追い求める・得ようと一心不乱に努力する」の意味となった。新約聖書はこの語をイエスのために受ける宗教的迫害の意味で用いるが、道徳的・宗教的・精神的な目標に対する努力を表す表現としても使っている。新約聖書での用法を次の三つにまとめることができる。

① 宗教的な意味での迫害。

この動詞の最古の用例はマタ五 10・11・12 の「幸い」の言葉である (Q 資料)。この例は、迫害された預言者やイエス、また預言者を迫害したイスラエルを表す用例に属しており、ほかには使七 52、ルカ十一 49、マタ二三 34 があり (最後の二例は、イエスの弟子たちが明確に預言者と対比されている)、マタ十 23 やルカ二 12 もこの用例に含まれる。マタ五 44 の「迫害する者のために祈れ」も Q 資料であり、最古の伝承に含まれる。パウロはこの言葉を取り上げて「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい」と説き (ロマ十二 14)、パウロ自身もそれを実行している (1 コリ四 12)。

② ある人の「後を追う」の意味で。

この動詞のこの用法はルカ十七 23 『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいいけない』に見られるだけである。

③ 精神的な財を「努力して求める」の意味で。

この用法はパウロやヘレニズム的キリスト教に属している。努力して求めるべき財とは善 (1 テサ五 15)、義 (ロマ九 30 - 31)、旅人へのもてなし (ロマ十二 13)、教会の平和や互いの向上に役立つこと (ロマ十四 19)、愛 (1 コリ十四 1) などである。

この動詞は完了受動分詞であるから、聖書協会口語訳のように「迫害されてきた人」と訳すことも可能である。完了時称は過去にあつたことを現在と結びつけて述べるので、現在に力点を置けば、「過去に迫害され現在も」迫害されている人たちの意味になるし、過去に力点を置けば、「過去から迫害されてきた人々」の意味になる。マタイの時代にキリスト者が受けていた迫害については、10 章 17 節以下を参照。

③ 今日の福音の第三段落 (11 - 12 節) では、弟子に直接的に語り掛ける。ルカの並行箇所 (6 章 22 - 23 節) と比較すると、マタイはここでも一般化している。つまり、ルカの「追い出される」や「汚名を着せられる」の代わりに、ずっと一般的な「迫害する」と「悪口を浴びせられる」を用いている。中傷や迫害を受けることを教会は原則として覚悟しなければならぬ。それは、とりわけ十一代目のローマ皇帝ドミティアヌス時代 (51 年 - 96 年・即位は 81 年) には現実的なことであった。新約聖書において数多い迫害の訓戒は、このことを例示するものである (ヘブル一 32・34、1 ペテロ二 12、三 14 など)。